巻頭言

市立甲府病院
呼吸器外科　宮澤正久

肺がんCT検診の普及からおおよそ10年が過ぎ、肺癌診療において"GGO"や"BAC"なる言葉を耳にすることが日常的になってきました。それに加えPETやMDCTといった新たな診断デバイスの出現、胸腔鏡下手術や縮小手術といった新たな手術手技の導入がみられ、15年ほど前に私自身が呼吸器外科医として修練を始めた頃を思い出すと隔世の感があります。CT検診により肺癌発見率は高くなり、肺癌手術数も増加の一途をたどっているものの、肺癌死亡率の低下にはいまだつながっていないのが現状のようです。

早期（微小）肺癌の治療にかかわることの多い呼吸器外科医として最近思うのは・・・
この小さな病巣が本当に癌なのか？
癌の可能性が高くても手術の必要性はあるのか？
術式は？縮小手術でいいのか？開胸手術は罪なのか？
・・・等であり、確定診断がついていて到底縮小手術の対象とはなり得ないであろう手術症例を前にするとある意味ほっとしてしまう自分があります。

今回の研究会から新たな試みとして、会のテーマを設け、一般演題の一部をテーマにそったものにするということになりました。今回は"早期肺癌に対する診断と治療"というテーマにさせていただき4演題の発表をしていただきました。

特別講演もそのテーマにそった御講演を愛知医科大学呼吸器外科の羽生田正行教授にお願いいたしました。肺がんCT検診の創成期より多くの早期肺癌の手術に携われたご経験をもとにお話をいただきましたが、奇しくも先生のご講演のなかで、"早期肺癌に対する手術術式は混沌とした時代・・・"なるお言葉がありました。1日でも早い混沌とした時代からの幕開けを期待したいと思います。